
ライジング・サン

武羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライジング・サン

【Nコード】

N2811S

【作者名】

鵲羅

【あらすじ】

建設会社現場代理人の唐沢幸也^{カラサワコウヤ}、警備会社ガードマンの三羽尊^{ミツタケル}、ライブハウス店員の須川凌太^{スガワリョウタ}は、高校時代のバンドメンバー。

5年振りにバンドを復活する矢先、三羽の元に小娘が転がりこんできた。

素性不明の小娘を「桜」と名付け、一緒に暮らしはじめた三羽だが小娘の背景に事件を知る……。

ロックと酒と仕事、「いつでもストレートに生きてえ」と不器用に
生きる若者たちの物語。

「馬鹿野郎！これじゃ儲けどころか赤字じゃねえか！なに考えてんだ、てめえは！」

宮岡は自分の席の前に立っている唐沢幸也を怒鳴りつけた。

唐沢は（・・・案の定の反応だな）と溜息が出そうになる。

「社長、索道を使わない施工なら、どうやったってこのぐらい掛かっちゃいますよ、実際に始まってみりゃこの予算でも厳しいぐらいだ。・・・仮設を見直すべきですよ。」

唐沢がそう言い終わる前に、宮岡は机上の「新建新聞」の束を手で払いのけ、さつき以上の怒鳴り声を上げた。

「馬鹿野郎！ろくに考えもしねえで仮設仮設って楽しようとしゃがつて！だからてめえら若えヤツらは仕事覚えねえんだよ！・・・索道張るのにいくら掛かると思ってたんだ！」

索道とは、主に山と山の頂点にワイヤーロープを緊張させて、軌道の下に資材や機械を運搬するロープウェイ状のクレーンの一種だ。

宮岡が手のひらを叩きつけた机には、唐沢が作った「砂防ダム工事実行予算書」が載っている。

（・・・クレーンもバックホーも入らねえような悪条件の現場だから、他の業者が避けてた物件を低価格で落札しやがったからこうなるんだよ。てめえと馬鹿部長のせいじゃねえか。）

唐沢はいい加減ウンザリして、無言で宮岡の前を立ち去る。

唐沢は工業高校の土木科を卒業して「宮岡建設工業」に就職。現場代理人として5年働いている。

この5年間はとにかく仕事を覚え資格を取るために、ただひたすら

仕事に打ち込む日々だった。

唐沢は仕事が好きだったのと、「若い」というだけでなめられるのが嫌という理由から無我夢中だった。

その努力の成果か、同期入社の方との能力の差は誰が見ても明らかになり、唐沢は下請け業者の親方たちにも信頼されている。

社長室を出て、自分の席がある部屋に戻る。椅子に座りパソコンを起動させると思わず溜息が出た。

「やられたかい？」隣の席の青木が声を掛けた、2歳先輩の痩せた男だ。

「まったく話しにならねえすよ、ウンザリだ。」唐沢はセブンスターに火を点けて天井に煙を吐いた。

「おっさんの悪い癖だな、人が書いた予算や計画にはとにかくいろいろ言いやがる。・・・そんていよいよになりや唐沢の計画通りに行かざるを得なくなる、自分じゃそれ以上の段取りできねえからな。・・・二代目社長の悪い癖だな。」青木の言葉の最後の方は、呆れ笑いのようだった。

唐沢は天井を見上げて過去のことを思い出す。・・・やはり山中のダム工事の現場だった。

どうしても必要だった仮設架台なので、綿密に計画を立てて宮岡に打診した。

宮岡は「こんなもんにこんな銭掛けて儲けが出るんか！ちったあ経済考えろ！」と一蹴した。

唐沢は「それなら社長お願いします。」と一切を任せた。宮岡が言葉通りの結果が出せるのか見たかったからだ。

宮岡に任せた部分は結局、唐沢の計画の1・5倍の資材と2・5倍の経費を掛けた。

「馬鹿に馬鹿呼ばわりされるのはマジでウンザリだ・・・。」

唐沢はタバコを灰皿でもみ消すと、起動したばかりのパソコンを落とす。

「青木さん、お先に帰りますわ。」と手を挙げる。

いつもは20時過ぎまで残務整理してるが、今日は18時過ぎに会社を出る。

ドアの横に社名の入った薄汚れたADバンのエンジンを掛けて、国道に合流する。

すっかり日が長くなったことに季節を感じた。

目の前の停止線に停まるクルマが多くなつた。

三羽尊は、点滅する誘導灯を水平に構えたまま、腕時計を見る。 1
7時32分。

思わず「チッ」と舌打ちが出る。

（・・・今日も規制時間を無視して延長かよ、急ぐ作業でもねえく
せに。・・・だから、ろくでもねえ代理人の現場はやダくなるぜ。・

・・・その内、苦情出るな。）

・・・思つた矢先に先頭のクルマの運転手がガラスを下げ、 「時
間過ぎてんじゃねえか！馬鹿野郎！」と怒鳴る。

三羽はいくらか神妙な顔を造り、ゆつくりと丁寧にアタマを下げる。

・・・その演技の良し悪しでドライバーの反応は如実に変わる。

先頭の運転手は渋いツラをしながらも、ガラスを上げた。

三羽は肩に付けた無線マイクのスイッチを押し、「こちら三羽、・
・まだ流せねえんかよ！」と、腹話術のように表情を変えずに怒鳴
る。

「・・・こちら荒井、すみません、ひっきりなしなもんで・・・
ホントすみません。」荒井は三羽相手のガードの日は、一日中謝つ
てることが多い。

・・・三羽尊は工業高校卒業後、自動車部品製造会社に就職したが
半年も経たない時、工場内で先輩と口論となり相手を全治一週間の
怪我を負わせてクビになる。

その後、高校時代の担任の世話で、小さな建設会社に勤めたがそこ
でも給料のことで揉めて、半年でクビになる。

仕方なしに新聞広告で見つけた「交通誘導員」のバイトで食い継ぐ

うと勤めた。それは意外にも長く続き、今年で4年になりバイトから正社員にはなったが三羽はちつとも満足してはいない。

・・・片側交互通行の規制がようやく終わる、18時を回っていた。三羽は大嫌いな現場代理人に、日報のサインを求める。当然「18時」と書き込んでいた。

「なんだお前、残業になつてんじゃねえか！一日中立ちんぼやって、なにが残業だ！ああ？」代理人は三羽と同じぐらいの年齢だが、完全に見下した態度だった。

・・・三羽の眼がスツと暗くなる。

「てめえ、一度死んでみるか？小僧。」

代理人の顔色は瞬時に変わり、無言で日報にサインして逃げて行った。

「・・・ああ、明日からは呼ばれねえな。会社もまたクビかもな。」

三羽は首の関節をポキポキ鳴らしながら、ポンコツの軽自動車へと歩いていく。

運転を荒井に任せて助手席に乗り込んだ三羽は、グローブボックスからニツカの小瓶を取り出して呷る。

携帯の送信履歴をスクロールして耳に当てる。

唐沢は帰路を走りながら、千夏に「じゃあ、またな。」と言って電話を切った。

千夏からは3日に1度ぐらいの頻度で、電話が掛かってくる。ほとんどが大して意味もない電話だから、切った直後ですら会話の内容を覚えていない。

「ふうん」とか「へえ」とか言って相槌を打つだけで、実際は聞いていないのかも知れない。

だが今日は気分が沈んでたからか、いつもより少しだけマトモに相手にする気になった。

けどどやっぱり、無意味な会話はいつもと何ら変わらなかった。

「・・・俺と千夏の関係って、なんなんだろう。」唐沢はボンヤリ考えながらハンドルを回す。

また携帯が鳴る、「Black Bird」・・・その着音は2人にしか設定していない。

「よう、忙しいかい？」三羽の声だった。

「今日はクソ面白くねえことあったから、もう帰ってるとこだわ。」

「そうかー、俺も同じだわ。」三羽は向こうで笑い声を上げていた。

「笑えるだけお前のがマシだぜ。」唐沢は溜息まじりで言う。

「・・・アッシュトレイズ・ローズ行こうぜ、リョウタに電話入れとく。」

アッシュトレイズ・ローズとは、唐沢と三羽と「リョウタ」こと須川凌太が、高校の頃から入り浸ってるライブハウス兼バーの名前。3人はそれぞれの名前を取って「三羽鴉」という名のロックバンドをやっていた。当時の学生バンドの中ではそこその動員力を持つ

バンドだった。

そして3人が高校を卒業する時にバンドは解散し、唐沢と三羽は就職したが、須川は就職せずにアッシュトレイズ・ローズでスタッフをやっている。

・・・18時。須川はホールの椅子を並べ終わり、ドリンク類の用意を済ませる。楽屋に上り、今日の出演者とミーティングやら雑談をして、スタート前の楽屋を盛り上げる。

平日の出演者はそれぞれが仕事をやり繰りして、早い時間からリハーサルに集まってくれている人たちばかりだから、自分も最大限のことをしようと思っている。

ちっぽけな地方都市だから平日のライブはガラガラだが、須川はこの空間で「表現する人たち」と「楽しむ人たち」に関わることに生き甲斐を感じる。

カウンターに入って受付のフライヤー類をきれいに並べ直していると、「リヨウタ、右のボーカルマイクが外れそうになってるよー。」と声が掛かる。

店長兼PAエンジニアの白井からだ、須川はすぐに直しに行く。

・・・「三羽鴉」としてステージに立ってた頃、自分たちの方向性や好みを一番理解してくれて、最適な「音」を作ってくれた職人。それが白井だった。

キャパのデカい他のハコのスタッフはいつも、ビジネス最優先の「上から目線」だったのに対し、ローズのスタッフは友達のようなだった。

カウンターに戻りタバコに火を点けると、携帯が鳴った。

Black Birdの短いイントロが鳴り、ポールが歌いだす。この着音は久しぶりだったので須川はAメロの途中まで聞き入り、慌てて電話に出る。

「やあやありヨウちゃん、おはるかで。 なっちょだえ？ お達者かえ？」 須川はその年寄りじみた挨拶に思わず笑い出す。

「こりゃこりゃタケルさま、おはるかだない。 お陰さんでまめつてえわい。」 今度は三羽が電話の向こうで笑っている。

「今夜、コウヤと行くけどさ、今日はどんなの演んの？」 須川はタイムテーブルを眺める。

「今日はアコデーだよ。」

「アコデーか、そりゃいいな。 話が聞こえるな。・・・あとで行くわ。」

須川は電話を切って、店の壁の色褪せた「三羽鴉」のステッカーに目をやった。

（・・・解散して5年か、俺は今でもここにいるから昨日のこのように思えるけど、ヤツらの中では色の褪せた思い出に変わっちゃまってるのかな。）

須川は今でも、当時のビデオやDVDをたまに観る。 無我夢中だった頃の記録を今は「プロの目」で客観的に観れる。

そしていつも思うのは、自惚れかも知れないが三羽鴉はいいバンドだったということ。

（・・・ヤツらが「またやろうぜ」と言えば、俺はすぐにでも曲を書くんだけだな。）

オープンの時間になった。 金曜日だからか客の入りはますます良い。

1組目のプレイヤーは、今日のはじめてステージに立つ人だった。・
・緊張しまくりだがそれが返って新鮮で、オーディエンスの目を惹きつける。

MCは支離滅裂だったが、彼女はまたこのステージに立つてくれるだろうと確信した。

ベテランの2組目の途中でヤツらはやって来た。

「宮岡建設工業」の作業着のままの唐沢と、「ワールド警備保障」の警備服のままの三羽。・・・思わず「ここが現場みてえだなー。」と笑った。

「おめえのツラ見るために急いで来たんだぜ、この野郎！」と唐沢が笑う。

2人はカウンターの前のスツールに座る。生ビールを3人で乾杯した。

三羽は店の中をキョロキョロ見回し、「なんも変わんねえなー。」とビールを呷った。

「・・・おめえら白井さんに挨拶したか？」と聞くと、2人は慌てて席を立ちPAブースの方へ向かった。

（やっぱヤツらとバンドやりてえ、いや絶対復活させる！）と、須川は決めた。

ベテランのステージはさすがだった、演奏もMCもオーディエンスを魅了して、目を逸らさせない。

「・・・すげえなあの人、なんでプロじゃねえんだろう。」唐沢がくわえタバコで呷く。

「音楽業界は腐ってるんさ、実力なんて関係ねえ。作られたもんが予定通りに売れてるだけさ。・・・音楽だけじゃねえがな。」三羽がジントニックを呷りながら言った。

（確かにそうかも知れねえな、本当の音楽ってもんはテレビやメディアとは無関係かもな。）須川は思う。

3組目が楽屋からのドアを開ける。チャチなギブソンを提げた昭和のチンピラ風情のおっさんと、チャップリンみたいな帽子をかぶりムスタングを提げた目つきの鋭いおっさんだ。

（・・・来た来た。）須川は2人の反応を楽しもうと、ヤツらを眺めている。

「・・・なんだあの変なおっさんたち、エレキじゃねえか。アコデーだろ？」唐沢が怪訝そうな眼差しを送っている。

昭和のおっさんがステージに向かう途中で踵を返し、唐沢と三羽の間に身体を割り込ませた。・・・三羽はもうキレル寸前の顔つきだ。「兄ちゃんたち、わりいわりい。・・・リョウタ、黒霧濃い目でお願ひ。」おっさんはひどい隙っ歯でヤツらに言っていると、水割りの焼酎のカップを持ってステージに行った。

「なんだあのおっさん、酔っ払いか？すげえ酒くさかったぞ。」三羽はまだステージを睨んでいる。

おっさんたちのステージがはじまる。さっきのベテランとはえらい違いの緩さだ。

「・・・なんだあいつら、酒飲みながらグダグダしてやがって。」唐沢はかなり不機嫌だ。

「歌もわからねえしな、大昔の歌謡曲か？」三羽も機嫌が悪そうだ。・・・そのうち、おっさんたちは客席にいる背のデカいおっさんと言い合いをはじめめる。

「なんだこれ？ふざけやがって！・・・おい、コウヤ、どつか飲みに行くぞ。」

三羽と唐沢は席を立った。「リョウタ、店終わったら電話くれやな。」唐沢が手を振る。

（・・・このおっさんたち世代が面白えんだがなあ。）須川は大笑いしている白井に視線を向けた。

三羽と唐沢は急勾配の暗い階段を降りて、コンビニに隣接した出入り口から駅の方へ歩き出す。

宵の口の繁華街を行き交っているのは、ネクタイを緩めたサラリーマンの群れや「これからが俺等の時間」とばかりに元気がいい学生たち、すぐにでもファッション雑誌のモデルになれそうなカッコいい女。

インターロッキング張りの歩道を肩を並べて歩く作業着の2人を追い越して行った。

「・・・ふざけたおっさんたちだよ、まったく。」三羽がタバコに火を点けながら言う。

「ふふつ、でも帽子のおっさんのギターのフレーズは気に入ったぜ、俺は。・・・古くせえ昭和の歌謡ブルースみてえな。」唐沢もポケットのタバコを出して点ける。

「リョウタが好きそうな感じのな。・・・そっぴやあいつ、バンドやりたくてウズウズしてるツラしてたな。」

「お前も判ったかー、やっぱそうだよな、あいつ。」

2人は近くの居酒屋の引き戸を開けて、「あとでもう1人来るから。」と4人掛けのテーブルで再び乾杯する。

さすがに金曜の夜だ、席はほぼ満席で、そこら中の座敷から喧騒が溢れている。小声じゃ会話出来ないぐらいだ。

「どうせリョウタも飲むだろうから」と麦焼酎をボトルで持ってきてさせた。しばらくの間、2人はお互いの鬱憤話を盛り上げる。

1時間ほどして須川が合流して、三度目の乾杯の焼酎を飲み干す。

「・・・なんかさー、ローズ行ったらバンド本気でやってた頃の気

持ちが甦ってきたわ。緊張っていうかさ、・・・ガラムの匂いで緊張して来るんだよ。」唐沢が笑う。

「色褪せた俺等のステッカー、かわいそうになったしな!。・・・またやるうかつてコウヤと話してたんだわ。」三羽は須川の表情を窺った。

「俺は大賛成だぜ! つかおめえらがそういう気持ちにならねえかなって思ってたんだわ!」須川は酒の酔いも手伝って、上機嫌で大声を出した。

話が決まると3人は時間の過ぎるのを忘れて、バンド復活に託す思いを止め処なく語り合う。叶うはずもない夢のような計画まで飛び出し、ボトルは3本目を頼む。

不意に唐沢の携帯が鳴り席を外す。帰ってきたら今度は須川の携帯が鳴る。

「いいよな、おめえら。女から電話来てさ。」三羽は本気で不貞腐れツラだ。

「コウヤは千夏、リョウタは紗希。・・・どうせブスな女なんだろうけどさ。」三羽はマジに不貞腐れている。

唐沢と須川は(・・・タケルみてえに見た目おっかねえヤツに寄り付く女なんているワケねえじゃん。)と内心思ったが、「仕事上、出会う機会ねえから仕方ねえよ。」と慰めにならない理屈で慰めた。
「・・・ああ、そこらにカワイイ女が落っこちてねえかな!。・・・したら拾って帰って、大事にすんのにな!。」三羽の目が据わって来たから、唐沢と須川は相手にしなかった。

午前1時、3人とも呂律の回らない挨拶をしてお開きにする。唐沢は自転車を押して、三羽は千鳥足で、須川は逆方向の帰路に向かって帰っていく。

「なんかひさびさに飲んだな!。」「ああ、気分いい夜だっけな!。」

「そんなことを言い合い、唐沢と三羽も別々の方向へ歩いていく。」

三羽は唐沢に手を振って別れ、線路の向こうにある自分のアパートに向かつて歩き出す。相変わらず千鳥足だが、春先の夜風の冷たさでいくらか酔いを醒ました。

途中、小便をしたくなり雑居ビルの間の小路に入る。幅1・5mほどの灯りのない小路で用を足していると、バンド復活に対するいろんな思いがアタマを過った。

（・・・クソくだらねえストレスばっかの毎日だけど、ヤツらとツラ合わせることが出来るだけでも楽しみだよな。）三羽は溜まりきった小便を延々と垂らし続ける。

・・・不意に路地の奥に目をやった、明らかに自分を見つめる視線の存在に気付きギョツとなる。小便は一瞬止まった。5mほど先の暗がりからこっちを見つめていたのは、背の小さな若い娘のようだった。

三羽は「はーっ」と息をつき、「びつくりするじゃねえか、この野郎。」と言い、残りの小便を出し切ると、明るい通りに出て再び歩き出す。

オレンジ色の照明灯の眩しいアンダーパスの歩道まで来た時、今日の一件を思い出した。（・・・そういや浮かれてる場合じゃなかった。あの馬鹿代理人の野郎、きっと会社に電話入れてるはずだ・・・。）三羽のご機嫌は一瞬にして不機嫌に変わる。

「ああ、うまく行かねえもんだ。・・・まあどうでもいいや、明日は明日だ！」アンダーパスに響く大声で騒ぐと、いくらか気が晴れた。

アパート近くの住宅地まで来るとクルマも灯りも減り、静寂の中に

自分の足音だけが聞こえる。．．．ところが、足音は自分だけじゃないことに気付く。

三羽は後ろを振り返る。．．．路地にいた娘が10mぐらい後ろにいる。今度こそ本当にギョツとなる。

（．．．もしかして幽霊か？）馬鹿馬鹿しいが酔ったアタマでは、そのぐらいのことしか考えられない。

三羽は少し急ぎ足でアパートを目指す。本当は走りたかったが、気分が悪くなってゲロを吐くのも嫌だから出来る限りの速度で歩く。

ようやく自分のアパートに辿り着いた、部屋は外付け階段を登って一番奥の「204号」だ。．．．廊下を進みながら階下の暗がりを探め見る。（．．．やっぱり着いてきた。）

三羽はポケットから部屋の鍵を取り出すと、郵便受けのダイレクトメールやチラシを取りもせずには部屋に駆け込んで鍵を掛けた。

（．．．呼び鈴を鳴らされたらどうしよう。）三羽は自分の小心さを痛感した。普段、虚勢を張って強がっている自分がやたら惨めに思えてくる。

ベッドに座り、ショートホープの煙を溜息まじりに吐き出す。薄い壁の向こうに神経を尖らせながら。

．．．だが、そうもしてられない、明日は今日と同じく6時起きだ。三羽は仕事着を脱いで寝巻きに着替え、目覚ましをセットして布団に包まる。

やっぱり寝付けない、早く眠ろうと焦るほど変な想像がアタマをグルグル回ってくる。（．．．金縛りに遭うかもしれない。幽霊が来たらどうしよう。）まるでガキのようにビクビクしている。

．．．壁の向こうで「こんこん」と咳払いの音が聞こえた。少し間をおいて、また聞こえた。（あの幽霊女、まだいやがる。）と思っ

たが、咳払いの音が辛そうなのと、朝まで咳き込まれたらそれこそ寝られないと思い、三羽は意を決してドアを開けた。

幽霊女はドアのすぐ横の壁付けボイラーの下に、膝を抱えて座っていた。三羽は玄関ドア上の照明をつけて様子を見る。

「駅前にいたヤツだよな、どうして着いて来たんだよ？」三羽が聞くと女はよろよろと立ちあがったが、上目遣いで無表情に黙っている。

・・・女というか、やっぱり小娘だ。地味な赤系のガーゼシャツにジーンズにスニーカー。背丈は150cmぐらいで顔が小さいから見上げてくる目玉がやたらデカく見えた。

年齢は判らないが、少なくとも自分よりは下だろうと思えた。変わらず黙ったままなので、「俺に用があるなら早く言えよ。」と言う。小娘は黙ったまま突っ立ってる。

三羽は小娘の顔をしばらく眺めていた。背が小さいので見下ろす姿勢のまま、お互い動かなかった。

・・・無表情の小娘の両目に水が溜まってきて盛り上がった。そして下瞼一杯に溜まるとポロポロと流れ落ちた。

小娘はまばたきもせず声もあげず、息を荒くすることもなく、ただ涙をこぼしていた。

三羽はいよいよ訳が判らなくなる。(・・・こいつマトモなヤツじゃねえんかや。それともなんか相当切迫した事情でもあるのか。) いずれにしても、この寒い夜中に建物の外で涙を流している小娘が不憫に思えてきた。

幽霊じゃなかったことも確認出来たので、少しだけ優しくしてやりたくなった。

「・・・お前が嫌じゃなきゃ、中で寝ろよ。」

三羽はドアを開け放したまま部屋に戻り、押入れから寝袋を出した。ちつぽけなテーブルをずらして自分が横になるスペースを作っていると、小娘が部屋に入ってきた。俯いたまま立っている。「そこ」とベッドを指差した。

時間通りに目覚ましが鳴る。近年で最高の辛い気分で起き上がり、くわえタバコで身支度をする。なるべく音をたてずに部屋を出た。赤錆の出た縞鋼板の階段をトントンと下りると、荒井がポンコツでやってきた。

途端に携帯が鳴る、会社の原田部長からだ。「中島建設の現場は柏木と清水に行かせたから、お前と荒井は会社に来い。」・・・覚悟はしてたがあまりに予想通りで、朝から溜息が出た。

「三羽、俺もあの代理人は嫌いだしアタマに来たことは何度もある。・・・お前の気持ちは判らねえでもねえ。」

「・・・はい。」

「でも、相手は友達でもケンカ相手でもねえ。金をくれる客だよな。」

「・・・はい。」

「お前はまだ若くて一人者だから、気持ちを抑えることが出来ねえんかも知れねえが、家に人間がいるようになったらそうは行かねえんだぞ。」

「・・・はい。」三羽は思った、（そっぴや小娘は、もう家に帰るかどっか行つただらうな。）

「鶴田営業部長が先方に謝りに行つてゐる、お前のひと言が大問題になつてんだぞ。」

「・・・はい。」（そっぴやあの小娘、ひと言もしやべらなかつたな。）

「部長が帰ってきたら誠意を見せて謝れよ、判つたな。」

「はい判りました、どうもすみませんでした。」と口先だけで謝り、その場を後にした。

三羽は今日も荒井のポンコツでアパートに帰ってきた。アタマの中はバンド復活に向けて、一日も早くスタジオリハーサルを開始しよう、あれこれ考えていた。

（・・・リョウタは曲書き出すつて言つてたし、コウヤはGIBSONのEB-3買つて言つてたし。俺も調子づいてプラスのピッコロスネア買つちやおうかな。）

「三羽鴉」は結成当時はcreamやBBA、といった3ピースバンドのカバーやstones、links、whoなどのカバーをやっていたが、須川が作ってきたオリジナルの方がカバーよりもずっと自分たちにしっくり来て、オーディエンスの受けも良かったの

で、後半はずっとオリジナルで通してきた。

・・・三羽はアパートの階段を上がろうと、自分の部屋を見上げた。

部屋には灯りが点いていた。

唐沢は社有のバンでいつも通り会社に向かう。20万キロを超えたボロは最近、エンジンの掛かりが悪い。

ゆうべの酒が少し残っていたが、バンドを復活させることで自分の生活に張り合いが生まれることが嬉しかった。

会社に着くと、宮岡は朝からどこかへ出ているようだった。(・・・どうせブレイン連れて、例の現場を見させてんだろ。自分じゃ段取りも銭勘定も出来ねえだろうから。) そう思いながらパソコンの電源を入れる。

「おはよう。お前、今日どうしてんの？あの現場行くの？」出勤してきた青木が聞いてきた。

「あの現場はさんざん見尽くして予算書まで上げたんで、今さら行く必要なんてないっすよ。・・・それに俺は大原重機の作業速度をベースに工程出したんで、あれ以上に早く安く上げられる段取りはないと思うし。・・・だけどやっぱ俺は索道施工の方が、絶対安く上がると思うてるけど。」

「お前と大原のコラボか、最強だな。・・・そっぴゃおっさん、現場行ってるみてえだな。好きにさせときゃいいよ、どうせ最後にやお前に頼まざるを得なくなるんだ。」

「・・・俺は正直、代理人変更したって構わねえと思ってますよ。最近マジでウンザリしててね。人を信用出来ねえ馬鹿社長のツラ見るのもウンザリ。」

「まあ、そうキレずにさ。お前は仕事も早えがキレんのも早えからな。」

青木は柔らかな笑顔で、唐沢の気分を鎮めようとする。(・・・この人は仕事はそこそこだが、世の中が回るためには不可欠な人種なんだな。)

だが、唐沢はその会話ですらどうでも良くなってきた。

結局、青木の手掛けた「道路改良工事」の竣工検査が近いたため、唐沢は書類作成を手伝った。金額も工種も少ないため、一日手伝っただけでだいぶ捗ったようだった。

18時過ぎに会社を出る。・・・実は、今日は仕事どころじゃなかったのだ。ガキの頃からの馴染みの楽器屋へ直行する。

唐沢はホッとして、ガラスケースに陳列されている憧れのGibsonを眺めた。・・・Gibson EB-3だ。

古くはcreamのジャック・ブルースが愛用していたエレキベース。フロントにバカデカいハムバッカー、リアにシングルを載せたソリッドの薄いボディ。

1968年頃のビンテージの中古品だが、「27万円」の値札が付いている。・・・半年前から気になっていた物件だった。

馴染みの店主にさっそく掛け合う、唐沢は貯金を下ろして現金を財布に詰めてきていた。

さんざん掛け合った末、24万円まで負けさせてハードケースや本革のストラップや、カールのシールドを付けさせた。

ボロのトランクにベースを積んで心ウキウキの唐沢は、三羽と須川に報告しようと携帯を出した。途端に電話が鳴る・・・Black Birdだ。

「ようタケル、昨日はおつかれさんー。俺さー・・・」唐沢が言いかけると、「・・・小娘が家にいるんだよ。」

「それは昨日聞いた、女が落ちてたら拾って大事にすんだろ？それよかさ、ギブソン・・・」

「それが現実になっちまって、帰ったらまだ部屋にいるみてえなんだよ。どうしよう。」三羽は気弱な物言いだった。

「・・・そうなんか。どうしようもなにもねえじゃん、うまくやれよ。」

「いや、そういう関係じゃねえんだよ。だからどうしようかなと思っで。」三羽は珍しくオドオドしている。

「いるみてえって、部屋に帰ってねえのか？」唐沢は少しだけイライラした。

「・・・部屋に灯りが点いててさ、たぶんいるんだろうな。」三羽は情けない声で言った。

「まあ、なんか問題あったらまた電話しろよ。・・・リョウタに電話しなきゃなんねえからまたな。」

三羽は携帯をポケットにしまい、また部屋の灯りを見上げた。

玄関のドアを開けると、廊下の向こうのリビングに小娘が見える。蛍光灯の灯りは点いているが、物音のしない部屋の座布団に座ってじっとしている。

部屋に入り「家に帰らなかったのか？」三羽が聞くと、しばらくして小娘は小さく頷いた。

三羽は小娘が初めて反応を示したことに少し驚き、いくらか進歩したような気になった。

「家はどこだよ？・・・俺が送ってやってやるよ。」言うとき小娘は三羽の方を向いて、唇を固く結んで激しく首を振った。・・・その反応にはかなり驚いた。

三羽は「お前さ、名前ぐらい教えろよ。」と聞いた。・・・小娘は一度顔を上げて逡巡したような表情をしていたが、申し訳なさそうに俯いた。

（・・・家出少女か。親と大喧嘩でもして飛び出したって訳か。）三羽は悟り、タバコに火を点ける。小娘は俯いたままだ。

・・・今まで気付かなかったが、小娘はかわいい顔をしていた。友達にでも紹介してもらったのなら、迷わずにつきあいたいと思う対象だろう。

事実、昨日の酒の席で「かわいい女を拾ったら大事にするのに。」なんて思っていた。

しかしそれはそういうシチュエーションで出会ったらの話で、こういう異常な出会い方とワケがありすぎる相手だと、不思議と恋愛感情や下心など微塵も起きてこない。

どっちかというと、親の気持ちを察するような変な気分に襲われる。（・・・まあいいや、どうせ俺は彼女もいねえ一人者だ。誰かに迷惑掛けるわけでも文句言われるわけでもねえ。）三羽はそう思い、

冷蔵庫からビールを出した。

クラシックラガーを2本出して、1本をテーブルに置く。

「お前、メシ食ってねえだろ？近くでラーメンでも食うか？それがコンビニに行くか？」三羽が聞くと、小娘は申し訳なさそうに首を振った。

「じゃあコンビニでなんか買ってくるわ。」と玄関を出て行く。

三羽はまだ冷え込む夜道を歩きながら小娘の素性を想像したが、まるで見当もつかずコンビニに着く。適当に弁当やパンや菓子を買い込んでアパートに戻って行く。

（・・・名前も教えられねえとなると、やっぱりなんか問題アリなんだろうな。）

三羽は不意に路肩の梅の木に目をやる。小枝の蕾が膨らんで、もうじき開花しそうになっていた。

（桜かー、寒いけどやっぱり春が近えんだな。）・・・三羽はふとひらめいた。

「あいつ名乗らねえなら、勝手に桜って呼ぼう。」

近くで救急車と消防車がけたたましい音をたてて走っていくのが聞こえた。

「・・・どこかで火事かや？」ステージがハネたアッシュトレイズ・ローズのカウンターのスツールで唐沢が言った。

須川はジントニックを唐沢に出す。「お前のEB-3いいじゃん。

思い切って良かったと思うぜ。」

「リョウタくん、そうでしょう？やっぱりね、現金は強いんですよ！」唐沢は膝の上のベースをいじりながら、満足気にジ

ントニツクを呷る。

「リヨウター、俺帰るからな。戸締りとか頼むぜ。・・・それからコウヤ。」

「あつ、はい。」唐沢は姿勢を正して白井の方を向く。

「おめえらが復活すんのは、俺も嬉しいぜ。・・・でもさ気まぐれじゃいけねえ。やつば続けてくことが大事だからな。」白井はシングルのライダーズを着込みながら、唐沢に言う。

「俺は大丈夫つすよ、高い銭払ってコイツを手に入れましたから。」

唐沢はベースをなでる。

「そうかー。・・・そういや、こないだの失礼なおっさんたちもさ、ああ見えてロックには真剣なんだぜ。」白井はそう言つと、笑いながらドアの向こうに消えた。

・・・唐沢の脳裏に、あの酒臭い隙つ歯の下品なおっさんの、ガラガラ声のブルースが響いていた。

三羽はコンビニの袋を提げて部屋に戻る、小娘は相変わらず黙ったまま座っている。

テーブルの上の缶ビールはそのまま置かれ、表面に水滴が垂れていた。

無人じゃないのに物音がしないのはなんとなく息苦しいから、見たい訳でもないがテレビをつけた。お笑いだかバラエティーがやっていた。

三羽は笑い声を背に、警備着を脱いで壁に掛かっているハンガーに吊るし、部屋着のスウェットを着る。

風呂場のお湯の蛇口をひねりリビングに戻ると、小娘は思いつめたような目で壁の警備着を見上げていた。・・・思い出してダンスからジャージを出して小娘に放ったが、まだそれを見上げたままだ。

・・・小娘に弁当を渡すと三羽に深いお辞儀をして、弁当に手を合わせてから食いはじめた。三羽は適当な惣菜をつまみにビールを啣る。

Black Birdが鳴る、「よう、店でコウヤと飲んでるんだけどさ、これから来ねえか？」須川からだった。

「これからかー？昨日遅かったからキツイわー。」時計を見ると1時を過ぎていた。

「おめえとコウヤは、明日休みだろ？・・・コウヤがギブソン買ったから、久々に合わせてえとさ。スネア持ってこいや。」

（・・・コウヤが何か言いたげだったのは、その事か。）三羽は夕方方の電話を思い出す。

そして（いよいよ転がりだすかー。）とワクワクしてきた。

「わかった、なるべく早めに行くわ。」と電話を切った。

小娘が黙々と弁当を食ってる脇で、押入れからケースに入ったスネアとスティックケースを取り出す。

「俺、ちよつと出掛けてくるから、勝手にやってるな。・・・鍵は持つてくから閉めといていいからな。」三羽が言つと、小娘は姿勢を正してお辞儀するように頷いた。

その仕草が滑稽に思えて、つい笑い出した。

スウェットの上に革ジャンパーを着て、玄関を出る時に思い出して言う。

「・・・それから、お前が名乗らねえから、俺は『桜』って呼ぶことにしたからな。」

桜はキョトンとした顔をしていたが、三羽はそのままドアを閉める。

ローズに辿り着くと「よう、いらっしやーい。」と須川がカウンタ―から、生ビールの入ったカップを寄越した。

ステージは透明な明かりに照らされ、唐沢がアンペグのベースアンプの調整をしていた。

くわえていたタバコをヘッドの4弦に挟んで、繰り返しリフを弾いている。買ったばかりのEB-3はビンテージらしく、野太いゴリゴリの音を出してる。

「コウヤの野郎、前よりいいんじゃないか。」・・・三羽は懐かしさとともに快い緊張が滲みでてきた。

しばらくして楽屋からのドアから、須川がストラトを肩からぶら下げて出てきた。赤いキャビネットのマーシャルにシールドを挿し込んで、唐沢のリフに合わせ始める。

足元にはクライ・ベイビーのワウペダルひとつしか置いていない。ギターマニアの1番お気に入りにはエフェクターなしでも、枯れた音色を出す傷だらけのサンバースト。

三羽はカップのビールを飲み干すと、両手の指をポキポキ鳴らして「いいいよはじまりますか。」と独り言を言つて、ステージに上がる。

スネアを自分のメイプルシエルの物に交換して、タムをひとつ外して自分に最適なポジションに調整する。

すべてが完了した時、3人はお互いに目だけの会話で「客のいないギグ」をはじめた。

creamのcrossroadsで延々とジャムをして、グルーブを高めていく。

転がりだして20分で、今までのブランクは吹っ飛んでいた。

リハーサルは結局、ぶっ通しで4時間。5年のブランクはあつという間に埋め尽くされた。「三羽鴉」は一夜で完全に復活した。

三羽が「もうダメ、両手の指のマメが潰れてもう無理!」と根を上げて終了となる。

「仕方ねえな、初日から飛ばしすぎかもしれないな。」と笑う須川の声もガラガラに噎れていた。唐沢のみが、「俺はまだ大丈夫なんだけんなー。」とEB-3をクロスで拭き始める。

午前4時過ぎの窓の向こうは夜明けの青い闇が、朝の訪れを連れて来ている。

唐沢と三羽はカウンターに座り、須川は酒棚の奥から自分のフオアローゼズを出してきた。ロックアイスを放り込んだカップにそいつを半分ほど注ぎ、あらためて乾杯する。

心地よい疲労と空腹の身体にはたまらなくしみこんでくる、3羽のカラスは一杯で酔いが回って来た。

須川がカウンター横のノートパソコンを立ち上げ、店のHPのスケジュールを検索する。

「・・・来週の土曜日の企画に空きがあるから、そこで復活デビューだな。」と2人の顔色を見る。

「おおええ、ちつと早すぎじゃねえか?それまでに何回リハ出来るか判らねえのに。」三羽はホープの煙が目には沁みたように、しかめっ面で言う。

「いくらか早え気もするが、俺はいいぜ。まだ現場がはじまってねえと思うから。」唐沢は相変わらずベースを磨き上げていた。

「・・・そりゃそうとさータケル、女拾って部屋に連れ込んでるらしいじゃん。」須川が興味深い顔で、三羽の前に肘を突いた。

三羽は言われるまですっかり、小娘が部屋にいることを忘れていた。

「連れ込んでるわけじゃねえよ。勝手についてきて、部屋の外で咳き込んでるからつかわいそうになって入れてやったんだけど、まだ帰らねえんだよ。」

「へえー。」須川はその状況を想像するように、天井を眺めながらK.O.Lの煙を吹き上げる。

「・・・まあ大事にしてやれば？」唐沢は磨き中のベースに目を落としたまま、他人事のように呟いた。

（・・・こいつらマジで他人事だよな。・・・でもどうしたもんか・・・。）三羽はいくらか憂鬱な気分になり、頬杖を突いてバーボンを舐めた。

「名前なんていうの？」須川が自分のカップに酒を注ぎながら聞いた。

「桜。」三羽は頬杖を突いたまま、ぶっきらぼうに答える。

「ほづ、いい名前じゃん。桜ちゃんかー。」唐沢は久々に顔を上げた。

「・・・名乗らねえから、勝手に名付けたんだけどさ。」三羽が言うと、2人は一瞬黙りその後爆笑した。

それから根掘り葉掘り聞いてくる2人に、三羽はありのままを話す。（・・・なんか面倒くせえな。）と思いながらも。

結局、朝6時に店の階段を下りて散開する。

また須川のみ逆方向へ向かい、唐沢と三羽は自転車を押してしばらく歩く。

「なあコウヤ、俺一人住まいだから、桜を預かってくんねえ？」三羽が言うと、唐沢は目を丸くした。

「バカ言え！お袋になんて言うんだよ。・・・千夏にも説明できねえわ、そんなの。」唐沢は母親と二人住まいだ。

「・・・早く帰ってくれりゃいいが。どうしたもんかと思ってさ。」三羽が溜息まじりで言うと、唐沢は三羽にいくらか同情した。

「少し経てば何か話し出しゃねえかなー。．．．どうしてもダメなら警察に届けるしかねえが。」

（．．．警察か、それだけはやだな。あいつらに頼みごとしたくねえし、なんとなく桜がかわいそうだ。）三羽は桜の仕草をひとつひとつ思い出していた。

「まあ、様子見てみるわ。」三羽は言っていると唐沢に手を振って別れた。

三羽の部屋に桜が転がり込んでから、5日が経った。

桜は相変わらず何も言葉を発しないし、時々思いつめたように俯く顔も変わらずだった。

三羽が何か聞いても、頷くか首を横に振るだけ。答えたくない質問の時は、聞こえてないかのように無表情になってしまっから、なるべく何も聞かないようにしている。

昨日は須川からメールが来て、「桜、失語症なんじゃねえの？なんかすげえツラいことがあるとそうなることがあるって紗希が言ってた。」と書いてあった。

（・・・失語症か。確かにこいつは時々ふさぎこむし、灯りを消した暗闇で泣いてるような声を上げてたこともあるな。）・・・桜が押しかけてきた時の、無表情の涙を思い出した。

三羽は自分の部屋にいるのに息が詰まりそうになることもしばしばだったが、嫌な気分ばかりではなかった。

現場から帰ってきて、自分の部屋の窓の灯りを見上げると妙に温かい気持ちになり、少しウキウキして階段を登る時もあるし、玄関を開けると部屋の中はいつもキレイに片付いていて、なんとなくいい匂いがしてる気がする。

カゴに放り込んだ服は洗濯されてキレイに畳まれて、ダンスに仕舞われている。桜が来た翌日から使っている布団も、昼間干されているようでフカフカしていた。

いつものように三羽はビールを飲み、桜はコンビニ弁当を食っている時、唐沢から電話が来た。

「・・・これからタケルんち行っていいか？リヨウタがオリジナルをセルフでレコしたCD-Rを持ってきたからさ。」唐沢は普段、

電話などせず勝手に玄関を開けて入って来る。今日は桜の存在を気に掛けてそうしたのだろう。

「ああ、いいよ。何時頃になるや？」チラリと桜を見ながら答えた。桜の表情がいくらか変わった。

「歩いてくから20分ぐれえかやー？なんか買つてくもんある？」

唐沢の後ろでクラクションが聞こえた。もう外に出ているのだろう。

「自分の飲むもんだけ買つてこいよ、酒あんましねえから。」桜は急にオドオドして、目をキョロキョロさせている。

「了解ー、じゃああとで。」「気をつけてな。」三羽は携帯をテーブルに置く。

「俺の大事なダチだから大丈夫だよ、心配ねえよ。」

それでも落ち着かない表情をしている桜を見ると、不意に肩を抱いてやりたい気分になる。（・・・やべえ、こういう気持ちはマジやべえ。俺こそ落ち着かねえと。）

時間通りに唐沢はやってきた、両手にでかいビニールをぶら下げて中にはバーボンから焼酎、ビールに缶詰、菓子から惣菜からインスタントラーメンまで入っていた。・・・外に出られない桜のために買ってきてくれたものも結構入ってるようだ。

「やあやあ桜ちゃん、唐沢つてもんだがよろしくー。」桜は少し警戒したような眼差しで会釈した。

唐沢は最初こそ桜に気を使っていたが、酒が進むとそんなことは忘れて、今後のバンドの展望について熱く語り出す。三羽も然りで、須川の作ったCD-Rの楽曲のアレンジに夢中になっていた。

桜は無表情のままなので、俺等の話を聞いているのかいないのか判らないが、不機嫌ではないのは判った。（・・・なんか微妙なところまで判るようになってしまったな、俺。）三羽は変な気分だった。

午前1時過ぎ、唐沢は帰って行った。

「・・・俺と同じで飲んだくれだけど、いいヤツなんだよ。判る？」

三羽はいくらか呂律が回らなかった。

桜は小さく頷いたが、唇の隅が少し微笑んでるように見えた。(・・・あれ?) と思いながら、「それでは明日も仕事なんで、俺は寝ますね、桜さん。」三羽はそう言うと、カーペットの上でイビキをかきはじめた。

唐沢は少し寒い夜風に吹かれて歩いているのが気持ち良かった。くわえタバコに鼻歌が交じる。(・・・タケルのヤツ、桜に惚れはじめちまいやがったな。)

「ヤツら、お似合いかもしれないねえな。」呂律の回らない呟きが口を突いて出た。

(・・・ん?) ・・・外灯が途切れた場所に差し掛かった時、唐沢は背後に気配を感じた。それは殺気に近い気配で、思わず足を止める。

振り向こうとした瞬間、後頭部に激しい衝撃が飛んできた。唐沢の身体は一瞬にして吹っ飛び、アスファルトの路上に叩きつけられる。「ううっ!」うつ伏せの姿勢から両手を突いて身体を起こそうとした瞬間、今度は蹴りが飛んできた。横っ腹を執拗に高速で蹴りつけてくる、呼吸が出来ず身体を丸めようとするが、カバーする腕にも背中にも靴が飛んでくる。全身に脂汗が吹き出してくる。

暗闇から繰り出される蹴りは、あくまで冷静でしつこい。(・・・殺すつもりでやってんのか、この野郎・・・) 唐沢は相手の顔を見ようとと思い、苦し紛れに顔を上げた瞬間に顎を蹴り上げられた。・・・意識が遠のいていくのが判ったが、どうにもならない。焦点の定まらない視界に走っていく男の後ろ姿が見える。・・・香水のような芳香が鼻をついた。

(・・・ちきしょうが。)

・・・アスファルト舗装を叩く雨の音が聞こえて、唐沢は目を開けた。

目の前に黒く光る路面が見え、雨粒が顔に跳ね返ってくる。唐沢は意識を失い倒れたことを思い出した。

うつ伏せの身体を捻って、ゆっくりと上体を起こして座り込む。途端に激しい頭痛に襲われ目が回り、吐き気がこみ上げてきた。

四つん這いになって腹の中のを吐き出すと、いくらか楽になった。

周りは薄明るくなっている。ずぶ濡れのまま路上にあぐらをかいて腕時計を見ると、午前4時20分だった。

（・・・タケルんちを出たのが1時過ぎだったから、3時間ぐれえぶっ倒れてたんか。）

黒いMA-1のポケットを探りセブンスターを出すと、少し湿ってたがなんとか吸えそうだ。

・・・思い出してジーンズの尻ポケットのウォレットを探る、無事だった。

手の甲で覆ったタバコを吸いながら首の関節を鳴らし、痰を吐き飛ばす。雨の中で吸うタバコは吐く煙まで湿気っぽくてあんまり美味くない。

セブンスターを遠くに弾き飛ばして立ち上がる。頭痛は相変わらずだが、横っ腹と背中の中の痛みの方が気になった。歩くにはその痛みの方がキツイ。

（まあ、痛えけど歩けるうちは死なねえだろう。・・・早朝出勤らしいクルマがキチガイみたいなスピードで駆け抜け、唐沢はアタマから水を被る。

普段なら20分掛からない道程を、40分掛けてようやく辿り着く。唐沢は借家の小さな家に、母親と2人暮らした。（・・・お袋が起きてなければいいが。）と静かに玄関を開ける。

家の中が静まっている様子里にホッとする。洗面所の洗濯カゴに濡れた服を放り込み、アタマを拭いたバスタオルを腰に巻いて、2階の自分の部屋のベッドに倒れ込んだ。

（・・・あの野郎は何者で、なんのために俺を襲ってきやがったのか。）唐沢はようやく昨夜の襲撃の相手のことを考えはじめる。

ベッドサイドに置いてあるジャック・ダニエルのボトルをラッパ飲みして、天井を見上げる。

（・・・それで、なんで急に走り去ったのか。・・・たしか俺が顔を上げて野郎の顔を見ようとした時だった。）湿気で茶色いシミが浮いたセブンスターに火を点ける。

走り去る男の後姿のシルエットは、かなり長身で痩せていた。細いズボンを履いた長い脚で大股に駆け去っていく男・・・。

吹き上げた煙と、天井の二セ木目の模様を眺めながらしばらく考えたが、思い出したことと言えば、「香水のような残り香」ぐらいだった。（・・・あれはなんの匂いなんだろう。）

・・・階下でバタバタと音が聞こえてくる。何をやるにも何時であろうとも賑やかな音を立てるお袋の一日のはじまりのようだ。

唐沢は出勤までの僅かな時間の睡眠を諦めた。

夜半から降りだしたらしい雨はずっと続いている。

三羽は周囲を確認しながら警棒をクルクル回す、口にくわえたままのホイッスルを「ピ、ピーッ！」と鳴らす。

それを合図にバックホーのオペレーターは旋回をはじめめる。180度旋回して、掘削した土砂をダンプの荷台に積み込む。

その後フロントアタッチメントを最小に抱え込み、三羽の合図で元の位置まで旋回して、溝状に開削された部分の掘削をはじめめる。

今日は片側交互通行規制の下水道工事の現場。本来なら車道の反対側へ旋回しての作業だが、民家と低い電線があるためやむを得ず、車道側へ回している。

三羽はストッパーを荒井と西村に任せて、一番気が抜けない役目を担当した。今日の3人のガードマンに立場上の違いはないが、偉そうな顔をしているせいか元請けの連中は、いつも三羽に声を掛けてくる。そして現場警備をやるもんだと決めつけている。どこの現場に行ってもそうだ。

雨は相変わらず止まず、合図で旋回の作業は午後4時まで続いた。

午後5時すぎ、規制解除してサインをもらい、重たい白い合羽を脱いで荒井が運転するポンコツに乗り込む。そしていつも通りにポケット瓶のニツカの栓をキリキリと回す。

ポンコツの軽はエアコンが壊れているので、たちまち3人の湿気でガラスが曇り出す。

「・・・三羽さん、やっぱり雨の日は疲れるっすね。」前を向いたままの荒井が溜息まじりで言った。考えてみると荒井は三羽より3つも年上だった。

「現場仕事だから仕方ねえよ、でも現場で作業してる連中のが俺等

よかキツいんだぜ。・・・特に今日みてえに17時解放の現場なんて、時間との戦いだからな。」

三羽は、雨の中仮復旧の舗装をしていた姿を思い出す。(・・・あんなテキトーな舗装で事故が起きないやいいが。)

後ろの西村はどうやら居眠りしているようで何も話さなかった。・

・片道2時間オーバーの帰路はキツかった。

午後6時半に携帯が鳴る、須川からだった。

「ようよう、おつかれさん。今日8時からオールドガレージでリハ、判ってるよな？」半分眠っていた三羽は、すぐにアタマが回らなかった。

「ああ、判ってるよ。今日、遠い現場だから直で行くよ。」目の前の街は灯りが点きだしている。ふと桜のことがアタマを過った。

郊外にあるリハーサルスタジオ「オールドガレージ」は名前とは違い、2年前にオープンした店だ。ロカビリーやブルースが大好きなオーナーの趣味で飾られたフロアは、年代物のグレッツやギブソンが並び、マニアックな本やグッズが溢れている。

三羽が警備着のまま店に入ると、須川がピックギターを手にオーナーと話していた。

「ようタケル、仕事帰りか？」人懐っこい笑顔でオーナーが三羽の肩を叩く。

「今日の現場遠くてね。・・・あ、そうだ。家帰ってねえからステイック貸してもらえます？」

オーナーはスティックがたくさん入った陶器の花瓶みたいな物を持ってきた。

「三羽鴉が復活すんの、俺も楽しみなんだぜ。お前らみてえな古臭い感じのやつてるヤツ、他にいねえからな。」笑いながらオーナーは2階の事務所へ上っていった。

須川はハードケースからストラトを出してチューニングする。

「今回は一発目だし、全部力バーで通そうかなと思ってさ。挨拶がわりにシブいセトリリストで攻めようかなーって。」須川はジミ・ヘンのリフを繰り返し弾く。

三羽は自分に合うスティックを選びだし、須川に合わせて膝の上でスティックワークをやる。

8時を少し過ぎて唐沢がやってきた。蒼い顔色で脇腹をさすりながら入ってくる。

「わりいな、いくら遅れた。」唐沢は肩からソフトケースを下ろすと、黒革のソファアールに座り込んだ。

「・・・具合悪そうじゃねえ？大丈夫か？」須川と三羽は、ほぼ同時に声を掛ける。

「大丈夫だ、とにかく時間がもったいねえからはじめようぜ。」

3人はようやくスタジオへ入る、中はまだ新築の家のような匂いがしていた。

須川が考えてきたセトリスト順に音を重ねていく。

2時間はあっという間に過ぎて、それぞれが満足できる仕上がりになっていた。

「OK！OK！こんな感じで行こうぜ！」須川が言うと、3人は建物の外へ出てタバコに火を点ける。オーナーが嫌煙家なのだ。

目の前の県道はひっきりなしにクルマが走っている。市街地と高速道路のインターチェンジを結ぶ幹線道路だから、夜中でも交通が絶えることがない。

「・・・コウヤ、なんかあったんか？」須川がK O O Lの煙を吐き出す。

「もしかして昨日、なんかあったんか？」三羽が思い出したようにつぶやいた。

「・・・昨日、タケルんち出て歩いてる時に、どこの誰だか判らね

えヤツに不意打ち喰らってな。」唐沢はゆっくり首を回してポキポキと鳴らす。

そして一部始終を2人に話した。

「・・・で、俺が思うに、タケルと間違えて襲ってきたと思うんだよ。」唐沢は目の前の水路にタバコを弾き飛ばした。

「俺の顔見た途端に、走っていつちまいやがったからな。」

三羽はなんとなく唐沢に申し訳ない気持ちになった。

「・・・とすると、桜に関係してる可能性があるな。」須川が言う
と、三羽はギクリとなる。

「・・・なんかコウヤに悪いことしちゃったような気がするわ、なんかゴメン。」三羽の落ち込んだ声に、2人は笑い出す。

「おめえが謝ることじゃねえよ。・・・じゃなくて今後どうするか
ってことさ。」唐沢は伸ばしたアゴ髭をつまんで言った。

「今度はタケルが襲われる可能性もあるし、桜がそうなる可能性もあるな。」須川は少し神秘的な声で言う。

「・・・お前、桜を守り抜いてやれよな！大事な女なんだろ？」唐沢の言葉がズキンと突き刺さった。

（・・・いや、俺とあいつはそんな関係じゃねえんだけど。）三羽は言えなかった。

なんか重大な事態になってるのに、自分だけボンヤリしてるような
気恥ずかしさがこみ上げてくる。

「ああ、そうだな。気をつけるよ。」三羽はそれしか言えなかった。

三羽は唐沢の社有バンで送ってもらう。

「・・・なんか、ただ事じゃ済まねえ気がするんだよ。」唐沢は前方から目を逸らさずに言った。

「・・・どういうことだよ？」返事を聞きたい気分だが、それしか言いようがなかった。

三羽はさつきから嫌な胸騒ぎに襲われて、一秒でも早く桜の顔が見たかった。

アパートの居間で、きよとんとした顔で出迎える「いつも」の桜の顔を見て安心したかった。

「あの野郎からすげえ殺気を感じたんだよ。・・・切羽詰ったというかなんと言うか、なんせ不気味なヤツだったわ。・・・ヤクザ者とは違う感じで。」

唐沢は少しだけ開けたガラスの縁にタバコを当てて灰を落とすと、灰皿でもみ消した。

「・・・背が高いやせた男か。」三羽は窓の外の暗闇に男の風貌を想像したが、知ってる顔は浮かんでこなかった。

アパートに到着すると、部屋の灯りが見えている。

「無事なようだな。」「そのようだな。・・・今日はありがとな。」

唐沢のバンはクラクションを控えめに鳴らして去っていく。三羽は安堵したが、少し重い気分で錆付いた階段を登る。

だが、部屋の前まで来た時、安堵の気分は一瞬にして吹き飛んだ。

玄関の薄いドアが少しだけ開いていて、中から灯りが洩れている。三羽は血の気が引いていくのを実感し、心臓の鼓動が耳鳴りのようにアタマに響いてくる。

ドアを開ける。狭い玄関にはサンダルの方がひっくり返っていて、三羽の黒いブーツは踏んづけられたように倒れている。・・・桜が履いていた小さいスニーカーは見当たらない。

慌てて部屋に入る。「桜！・・・桜！」思わず大声で呼びながら狭い部屋を探すが、いないことはすぐに判った。

テーブルの上にはタウン情報誌がページを開いたままになっている。プラスチックのゴミ箱が空っぽのまま倒れている。

いつもキレイにしてくれていたあいつらしくない感じが、嫌でも目に付いた。

カーテンを開けガラスを開けると、洗濯物が夜風に揺れている。

三羽はしばらくの間、茫然と立ちすくんでることしか出来なかった。（・・・コンビニに行くことすら恐怖のように首を振っていたあいつが、ひとりでどこかに行くはずはない。）

三羽はもう一度玄関の様子を眺める。（誰かに無理矢理連れていかれた・・・。背の高い男・・・。）

三羽は思わず玄関を飛び出し駆け出す、駅前まで走り続ける。桜が暗い目で自分を見つめていたあの小路まで。

多分見つかりはしないだろうと思いつつも、三羽はそうせずにはいられなかった。

腹わたが煮えくり返るほど悔しくて、不意に涙がこぼれてくる。

唐沢の家のブロック塀の外に、黒い軽自動車が停まっていた。

（・・・千夏、来てんのか。嫌なときに来やがったなー。）と、脇腹をさすりながら玄関を開ける。

「おかえり、千夏ちゃん来てるよー。」お袋がにこにこしながら出迎える。

「ただいま。・・・ああ、そうだね。」階段を上がりながら（・・・

クルマ見りや言わなくても判るさ。」と、いくらか憂鬱な気分になる。

唐沢は部屋の襖を開ける前に、自分の体調が悪いことを悟られないように姿勢を正す。

「おかえりー、コウヤ。」千夏は唐沢のパソコンを勝手にいじりながら、コーヒーを飲んでいる。パソコンから目を離さない。

唐沢は「お前、パソコンにこぼすなよ。」と言いなから、作業着を脱いで部屋着に着替える。自然に振舞うのが苦痛で仕方なかった。

「・・・コウヤ、どこかでケンカでもしたの？顔色悪いし、どこか痛そうだね。」思わずギクリとなる。

「え？なんともねえよ。そんな風に見える？」と聞くと、「嘘ついても判んの！」と笑った。

（・・・こいつは何でもお見通しな女だな。）と、恐ろしくなる。

唐沢はどうせ隠しきれないと思い、昨日からの経緯をすべて話した。やられっぱなしの部分は非常に話しづらかったが。

「怪我は大したことねえと思う。肋骨にヒビはいつてるかもしれないけど、治しようねえし。」言っではみたが、あの執拗な蹴りは思いつくとゾツとなった。

その時ばかりはいくらか神妙な顔をした千夏だったが、そのあと、
「・・・で、タケルくんちの桜ちゃんてどんな娘？」と中年のおばさんのように、根掘り葉掘り聞いてきた。

唐沢は自分の目で見た桜の印象を話したが、彼女の容姿を誉めるようなことは一切言わない。（・・・なにをキツカケに嫉妬しだすか判らねえからな。）と、警戒してだ。

・・・台所を下りて国産ウイスキーの瓶とグラスを2つ持って上がる。お袋は居間でテレビを見ていた。

「・・・さっきの桜ちゃんのことなんだけどさー。」千夏は考え込むような表情で、溜息をつく。

「・・・先月、井川貿易って会社でガードマンが殺された事件、憶えてる？」

千夏は唐沢が作っている水割りのグラスに目をやりながら聞いた。

「ああ、そっぴやそんな事件あったな。・・・まだ犯人つかまってるねえんだよね？」

唐沢はダブルの水割りを千夏の前に置く。

「あ、氷持ってくるわ。」と階下に行き、冷蔵庫からロックアイスを持ってくると、千夏はぬるいままの水割りをなめていた。

「あたしんとこの店の香織って子の家が、そのガードマンの自宅のすぐ近所らしいんだけど、その家は殺されたガードマンのひと娘の二人暮らしだったんだって。」

「ふうん。」

「で、事件のあとお葬式が終わって少ししたら、その子が行方不明になっちゃったって言うててさ。」

唐沢は氷を放り込んだグラスにウイスキーをなみなみ注いで、指でかきまぜる。

千夏は氷をふたつ掴んで、自分のグラスにポトンと落とす。

「で、香織が話してた行方不明の子と、タケルくんちにいる子の特徴とか背格好がなんか似てるんだよね。」

「・・・なんか気になるな、あれいつだっけ？・・・新聞残ってるかもしれないから調べてみようか。」

唐沢は階下の居間の押入れの新聞の束を持ってきて、部屋の真ん中にドスンと置く。

「2ヶ月分ぐらいはあるかな。」新聞の束を半分に分けて、ふたり

で手分けして調べる。

10分ほどで「あつ、あつた！これだこれだ！」と千夏が声を上げた。

地方版の社会面に大きめの見出しが付いていたから、簡単にみつかったようだ。

「いい？読むよ。『勤務先でガードマン殺害される 2月25日午前5時頃、井川貿易（株）構内で同社警備勤務の西柳静司さん（45）が、背中を刃物で刺されて倒れているのを、交代勤務で出社してきた警備員が発見。西柳さんは病院に搬送されたが、死亡が確認された。所轄署では殺人事件として捜査をはじめている。』・・・だつて。」

千夏は新聞を四つに畳んで、唐沢に渡した。

「・・・あれから解決したつてニュース聞かねえよな。」唐沢は渡された記事に目を落とす。

三羽は溜息まじりの煙を吐きながらアパートへ戻る。周囲のことがまるで目に入らないほど虚ろだった。

短くなったショートホープを水路に弾きとばして、俯き加減で歩く。「・・・あいつがいなくなった部屋に帰るのやだな。」ブツブツ咳くように言いながら、（もしかして帰ってるかも・・・）と思いたくなくなった。

しかし一縷の望みは絶たれ、部屋の玄関は半端に開いたままだった。

三羽は空っぽの部屋の、桜の指定席ともいえる座布団に腰を下ろした。

さつきから溜息ばかり出る。普段、虚勢を張って強がってる自分がおさら女々しく思えて情けなくなってきた。

テーブルに放り出した携帯が「Black Bird」を奏でる。

「・・・もしもし。」三羽は声を装うこともできず、暗い声で出る大勢の話し声や楽器の音が聞こえ、しばらくして「ようよう、リョウタだけどさ、さつきはおつかれさん！」と上機嫌な声が聞こえてきた。

「店に帰ったらさ、明後日のライブ、俺等分で52枚も売れててさー！かなり期待されてんぞ！三羽鴉。」

それは確かに快挙だった。月一でステージに立ってた頃のマックスが40枚だったから、いかに今回の復活を待っていた人が多いかを物語っていた。

「今回、オールダグレイジ企画なんだけどさ、ヨシトモさんここでだいぶ売ってくれたらしいんだ。」

だが今の三羽は正直に言えば「ライブどころじゃない」心境にまで落ち込んでいた。

「・・・それはすげえな、ありがてえな。」そう言うだけで精一杯だった。

「・・・あれ？どうしたい？元気ねえじゃねえかー。」須川はそう言ったが、チケットの売り上げで舞い上がってるようで、あまり心配してる風でもない。

三羽はバンドを引っ張っている須川の気持ちに水を差すのも気が引けて、「いくら疲れてんのかもしんねえや。」と嘘をついた。

「そうか、現場遠いしな。・・・お前やコウヤに無理させちまってるかや？俺。」

三羽は、そう言われるとなおさら真実を言えなくなる。

「そんなことあねえさ、俺もコウヤも楽しみにしてるさ。」

「そうか、なら明後日よろしくな！どうせサウンドチェックは出来ねえだろうけど、今日の調子で行けりゃぶつつけてOKだからさ。」
須川の電話の向こうは変わらず雑踏のような音が響いている、白井の吐き出すガラムの香りまで匂ってきそうだ。

「ああ、判ったよ。なるべく早めに入るわ。」

三羽は携帯を放り出し、棚に並べてある瓶の中からROLLING

Kの栓を開けてラッパ飲む。

押入れの段ボール箱の中のCDをあさり、古いBLUESばかり
選り出した。

ロバート・ジョンソン、ソニー・ボーイ、エルモア・ジェイムス・
・。

酔いに任せてすべてを忘れてなくなった三羽は、携帯の電源を落とした。

『コチラハNTTドコモデス・オカケニタデンワハ・デング
ンガハイッテイナイカ・デンパノトドカナイバシヨニアルタメ・カ
カリマセン』

「・・・だめだ、タケルの電話通じねえや。」唐沢はクッションの
上に携帯を放り出し、パイプベッドに凭れかかる。

「タケルくん、普段通じないこともあるんだ。」千夏は2杯の水割
りで頬を紅くしていた。

「いや、そんなことねえけどな。・・・あつ！」唐沢は突然
身を起こした。

「タケルさん、邪魔されたくねえ時間なんかもしねえぞ。桜とさ、
ああやってこうやって・・・。」

「・・・やらしい言い方すんなよ、コウヤ！」千夏はそう言つと、

唐沢のアタマを小突いた。

「まあいいや、明日電話すりゃあ。・・・それとお前さ、その香織って子に桜の家の住所聞いといてくれねえか？」

17時まで通しの片側交互通行規制の場合、ガードマンたちは交代で昼食をとる。

12時30分になり、ポンコツ軽の助手席でコンビニの握り飯の包装を解いていた三羽の携帯が、Black Birdを奏でた。

「・・・やつと繋がりやがった。ゆうべはどうしてたい？」唐沢の声の背後で、電話のベルや話し声が聞こえる。事務所からだろう。

「・・・ああ、携帯の充電が切れちまってたの忘れててさ。」三羽は二人に嘘をつくのが少し気が引けた。

「そうかそうか。・・・実はさ、桜の素性が判明するかもしれねえ情報が入ってさ。」

「桜の素性？」途端、三羽は背筋から脳天に向かって痺れるような衝撃がきた。

「それはどうということだい？」声の震えが唐沢に伝わっていないか気になった。

「昨日、千夏が家に来てさ・・・」唐沢はゆうべの一部始終を話した。ガードマンの殺人事件・二人暮らしだった娘の失踪・新聞でその記事を探し出したこと。

「・・・それで千夏には、近所に住んでるっていう同僚に住所を調べてくれて言つといたから、じきに判ると思うわ。」

・・・桜が三羽の部屋に転がりこんできたばかりの頃、壁に吊るした警備服をいつまでも眺めていた姿が脳裏に過った、まばたきもせずじっと見上げてた桜の眼差し。

「それでさー・・・それでさー・・・おい！聞いてんのか？」

「あ、ああ、わりいわりい。」三羽はフロントガラス越しに見える

民家の壁に、桜の横顔を投影していた。

「リヨウタから連絡いつてると思うけど、明日のライブのチケットの売り上げ、相当なもんらしいじゃねえ。・・・リヨウタすげえ気合い入ってるしさ、俺等も期待に応えなきゃな！」

「ああ、そうだな。」三羽は気のきいた言葉を返すことが出来ない。
「・・・お前、大丈夫か?・・・まあいいや、明日はなるべく早めに入ろうぜ。じゃあな。」

三羽は右手に握り飯をつかんだまま、しばらくブーツとしていた。左肩の無線の送受信器が「三羽さんどうぞ。」と言う。「・・・はいどうぞ。」

「・・・時間過ぎてます、どうぞ。」腕時計を見る、13時11分だった。

「ごめん!すぐ行く・・・どうぞ。」こういう場合の昼食時間は30分しかないのだ。

三羽は握り飯をダッシュボードに放り出し、ヘルメットをかぶってクルマを下りた。

『OLD GARAGE GIG Vol.69』

アッシュトレイズ・ローズの入り口の、白いタイル壁に貼られたA4のメニュー。

今日はオープン前から人が集まっていて、隣のコンビニのあたりまで列が出来ていた。

唐沢と三羽が到着した頃、3階からはすでに重低音が響いている。急勾配の階段を登る、2階は『テナント募集中』の空き事務所。そこから上は暗がりだ。

二人のブーツの踵の音が窓のない空間に響く。
もう使われていないタバコの販売機の向かいのドアを押すと、爆音

と共にインドネシア煙草の香りが鼻をついてくる。

須川から来た「入り口入場困難、隠しドアから入れ。」のメールに従って、エントランスのピンク色のドアの右側にある壁のような扉を開ける。

生ビールの樽やコンテナが積んである廊下の先に、ちょっとしたシンクがある。そこからまた急勾配の階段を登った4階部分が、ローズの事務室と楽屋スペース。

二人が階段を上がりきると、スリーフィンガーのブルースが聴こえてきた。

「よう、お疲れさん。・・・お前ら動員力すげえじゃん！もうキヤパいっばいだぜ。」オールドガレージのオーナーは愛器の薄緑色のグレッチで古いデルタブルースを爪弾いていた。

「今日はお世話になります、久々なんでいくらか緊張しますね。」

唐沢と三羽はペコリとアタマを下げる。
オーナーはグレッチをスタンドに置き、「お前らトリだから、よろしく頼むぜ！」と、階段を下りていく。

唐沢と三羽にとって、ローズの楽屋に入るのは5年振りのことだった。

あらためて周囲を見回すと、だいぶリニューアルされている。

かつての楽屋は、使用不能のギターや割れたり変形したシンバル、買い替えて用済みになった機材等が積み上げられ、雑多に散らかっていた。

物置の空いたスペースに椅子とテーブルが置いてあるといった感じだった。

・・・今日の4階は、まず事務室部分が別室に仕切られていてビジネススペースとして楽屋と隔絶させているようだ。

散らかっていた楽屋部分は余計な物を排除して、大勢のバンドマンやアーティストがくつろげるよう配慮されている。

「おお？試着室か？」と唐沢が驚いた視線の先に着替え用の個室が設置され、その右側には横長の鏡とカウンターが据えつけてあり、出番前の「顔作り」に快適な設備になっていた。

テーブルの上には『三羽鴉』と書かれたセトリリスト・要望等の記入用紙とともに、ドリンクチケットが3枚挟まったクリアファイルが置いてある。

「・・・なんかすげえな。前にリョウタが、改装してんだよって言うってたけど、えらく変わっちまったもんだなー。」と唐沢が2枚のドリンクチケットをブラックジーンズのポケットに挟じ込んだ。須川の分を横取りするつもりだ。

三羽はスネアケースを、唐沢はEB-3のハードケースを開けて簡単にチューニングすると、階下のホールへと降りていく。

二人はカウンターの中の須川に「よう」と片手を上げるが、ドリンクを作るのが忙しい須川は軽く頷くだけで、視線は手元と旧式のレ

ジから離れなかった。

ステージでは長身の痩せたボサボサ頭のボーカリストが、圧倒的な存在感を放って歌っている。多分30代の4人バンドだった。

かなりテクニシャン揃いのようだが、黙々と演奏している姿はどこまでも生真面目そうで「・・・あの人たちは普段、優秀な企業人なのかもな。」と三羽はつぶやく。

「そんな感じだな。オリジナルだろうけど、すげえいい曲だな。」唐沢はそう言うと、カウンターを向いて「リョウちゃん！ジントニツクプリーズ！」

ステージ上のボーカリストが「最後の曲です、レイン。」三羽はその曲にのめりこんだ。

人いきれでムンムンしているホールから、PAブースを眺めていた三羽と白井の視線が合った。

白井は輪郭のはっきりした大きな目の鋭さを緩め、右手の親指を立てて見せる。相変わらず口元には濃厚な煙がトロリと漂っている。

「・・・なんか、ホームに戻ってきた気がするな。」三羽はこの瞬間だけ、桜の失踪を忘れていた。

突然、三羽と唐沢の僅かな隙間にぶつかると同時に人が割り込んできた。二人に同時に嫌悪感と苛立ちが走る。

「お、わりいな兄ちゃんたち。リョウタ、黒霧濃い目でよろしく！」

・・・案の定「下品な隙っ歯なおっさん」だった。おっさんは今夜もチンピラみたいな格好とセンスのない安っぽいサングラスで、ガラガラ声でステージをヤジっている。

三羽は「ム力つくな、このおっさん。」と目で合図したが、唐沢は「今夜は大事な夜だぜ、我慢しな。」と苦笑いで首を横に振った。

須川はそんな二人の心情を察してつい笑い出す。

「タケル、ほらよ。」濃い目のジントニックのカップを二羽に渡した。

バンドはアンコールをもらい「・・・それじゃ1曲だけやらせてもらいます。」

長身のボーカリストはいくらか照れたような渋々のような表情で、バラードを歌いだした。

「・・・あのバンド、CD出してんの？」三羽はカウンターを振り向いて、須川に聞いてみた。

「多分あるよ、買うか？」須川はそう言うと、酒棚の下の滑り戸の奥から1枚のCDを出してきた。

「あつたあつた、2枚しか残ってねえな。・・・ほら。」三羽はビニール袋に入った薄手のケースを手取る。

さっきの曲が入ってるか気になる。「・・・あつた、The Rain。これだな。」

次のバンド、つまり三羽鴉の出番の前のバンドが、ステージでセッティングを始める。

伊那の3ピースロックンロールバンド。もはやセミプロの域のバンドで高校生だった5年前に圧倒されまくった記憶は今でも鮮明に残っていた。

唐沢はカウンターを振り向き「・・・おいー！俺等このあとかよ！・・・白井さんもヨシトモさんも鬼だな・・・。」

ベテランロックバンドのステージはさすがとしか言いようがなかった。

ワインレッドのGibson ES-335のポテンシャルを最大限に引き出して「ロックの在るべき姿」を体現しているボーカル＆ギター。

華奢そうな体格なのにバンドのボトムを上へ下へと自在に操るベー

スマン。

ハンティングを被りうつむき加減なトラディショナルグリップのドラマーは、シンプルでタイトなビートを叩きだす。

「・・・うー、あの頃と同じかそれ以上だな。参るぜ・・・。」

唐沢は何杯目かのジント二を空ける。

「まったく、観れて嬉しいが俺等がこのあとなんだからな。・・・参った。」三羽はポケットから500円玉を出して、アーリータイムスのロックを頼む。

須川はニヤニヤしながら、「いいじゃねえか、あの人たちはあの人たち。俺等は俺等。・・・桜梅桃梨だよ。」

「オウバイトウリ?・・・なんだそれ?」三羽の質問に須川は笑って答える。

「サクラ、ウメ、モモ、ナシ・・・それぞれ違った良さがあるってことだよ。」

「・・・サクラ、ウメ・・・。」唐沢が復唱する声で、(・・・サクラ。)三羽は不意に胸が痛んだ。

『ロックンロールのパワー!パワー!』目の前のバンドはオーディエンスを激しくうねらせ、前へ後ろへ右へ左へと波打たせている。羨望の眼差しで茫然としている唐沢と三羽の後ろで、須川だけは余裕しゃくしゃくの笑顔でステージを観ている。

ギタリストはE S - 3 3 5を持ち上げアタマの後ろへ回し、狭いステージを踊りながらギターソロを弾いている。

唐沢と三羽がそれに見とれていると、「そろそろ上がろうぜ。」須川が声をかけた。

振り向くと須川の隣に見慣れない娘が立っていて、ドリンクを作っている。

「この娘もバンドやってんだよ、また見てやってくれな。」須川はそういうと娘の肩を軽く叩いて、楽屋につながるドアの向こうへ消えた。

二人は満員状態の人の隙間を縫って、須川のあとに続いた。

5年前もそうだったが、本番前の三人は極端に無口で静かになる。無言のまま須川はサンバーストのストラトを、唐沢はE B - 3のコンディションを確認しながら、指板潤滑スプレーをかけてクロスで拭きあげる。

三羽は同じ銘柄のスティックを5セット、つまり10本を順々に振ってみて、しつくり来る4本を選び出す。

「あ、そうだ。」唐沢は思い出したようにシャツを脱いで、素肌に巻いたサラシのような布をキツく巻きなおした。

「これ緩んでるとアバラがまだ痛くてな。」

「・・・ほ。」須川が今夜のセットリストを書いたB 5の紙を、二人に手渡す。

階下ではバンドの重低音とオーディエンスの喝采が響いているが、楽屋では須川がK O O Lの、唐沢がセブンスターの、三羽がショートホープの煙を吐き出す呼吸と、首や指の関節を鳴らす音しか響かない。

・・・ベテランバンドのステージがはねた。数分して汗だくで息を切らしたメンバーが上がってきた。

「おつかれさまでした!」「ありがとうございます、トリがんばってくださいね!」それぞれが挨拶を交わす。

ベテランバンドのメンバーは、ステージではオーディエンスを煽動しまくるパフォーマーなのに、楽屋に戻ると非常に穏やかで低姿勢だ。

「じゃ、行きますか。」須川が立ち上がる。

三人は黙ったまま階段を下りてホールへ入る。場内は満員のざわめきの中、オープニングSEに選んでおいたDORSの「People Are Strange」が鳴り響いていた。

・・・唐沢は暗がりから左肩を叩かれた、振り向くと千夏が笑って立っていた。

「コウヤ、復活おめでとう。観ててやるからがんばれよ!」とデカい声でもう一度肩を叩く。

千夏の背後には、須川の彼女の紗希が微笑んで立っている。

唐沢の後ろにいた三羽は少しだけ寂しい気持ちでステージに向かうと、「タケルくん、桜ちゃんは来てないのー?」と千夏に声を掛けられた。

「あ、ああ。来てないんだよ。」三羽は(・・・もう、いないんだよ。)と心の中で呟くと、いくらか鼻がツーンとなった。

「・・・そっか、今日会えるかなと思って楽しみだったんだけどな。」

三羽はSEの音で聞こえない振りをしてステージに上がる。

床に置いたクライベイベーからマーシャルにシールドを突っ込んだ須川。

千夏のおごりのカップを、目の前のメインスピーカーに置いた唐沢。

スピアのスティックをバストラのテンションボルトの隙間に差し込む三羽。

須川がPAブースの白井に合図を送ると、SEはフェイドアウトされた。

SEのフェイドアウトとともにホールの客電が消え、ステージのライトも落ちて、ハコの中は一瞬の暗闇と静寂状態に包まれる。

三羽がスティックでカウントを取り、スネアを一発入れる。「カッ
カッカッ・ド・タン！」

須川と唐沢がユニゾンでリフを入れる、『Cross Roads
/ Cream』

ステージが透明のライトに照らし出される、自信満々の薄ら笑いでオーディエンスを見据えながらイントロリフを弾く須川。

吸いかけのセブンスターをヘッドの4弦に挟み、ブリブリの太い音でうねりを生み出している唐沢。

二人を交互に眺めながら、思い切りリムショットで強力なビートを叩き出す三羽。

ホールはすでに波立ち、各々が三羽鴉のグルーブを楽しんでいる。

「I went down to the cross roads
s, fell down on my knees・・・」

須川の声は図太く囁れ、ヴィンテージのストラトの音色に良く似合っている。

ワウを踏みながら延々と繰り返す須川のソロに、唐沢のリフが絡みつき、客を一層煽動させる。

8分のオープニング曲が終わると、『Hello!三羽鴉です。』

それだけの挨拶でカッティングがはじまる、『All day
and all of the night/The Kinks』

三羽鴉が結成した頃からやっている曲で、中間で三羽のドラムソロが入る。

オリジナルは3分ぐらいの曲だが、三羽鴉バージョンは倍の6分。間髪入れずに次曲のビートを畳み掛ける『I Can't Exp

lain/The Who』

須川のリードボーカルに、唐沢・三羽が合いの手のようなサブボーカルが入る。

バンドもオーディエンスも、もはや汗だくだ。

「・・・5年ぶりに今夜、三羽鴉復活です。多くのオーディエンスが最後まで残ってくれて感謝です。」須川のMCに歓声と拍手が飛んだ。

唐沢はカップのアルコールを飲み干すと、ベースをチューニングする。

三羽はシンバルスタンドに掛けたタオルで顔を拭いながら、薄暗いホールを眺める。

・・・右から左に一巡した時、何か心に引っ掛かってくる奇妙な視線を感じる。

ライドシンバルの上の空間の向こう、カウンターの角にいる男の視線が、真っ直ぐに自分に向いているのを感じる。

それはローズで音楽を楽しむためにやって来た人間の眼差しではない。

明らかに異質な視線であり、なにか思惑を感じる「射抜く」ような鋭さがピリピリと伝わる。

三羽がその男を凝視しようとした瞬間、「それじゃ最後の曲になります、今夜はありがとう！」須川の声とともにホールは暗がりに戻る。

『Communication Breakdown/Led Zeppelin』

バンドとしては久々にカバーした曲だが、それが返って新鮮に感じる。

須川と唐沢は目の前のオーディエンスとともに、恍惚の境地に達しているが、三羽だけはさっきの男の視線が気になり、淡々と叩き続けた。

（・・・これで客電が点いたら、ヤツの正体を確かめよう。）
予定以上に最後のソロが長くなった、須川と唐沢から飛んでくるアイコンタクトで承知した三羽は、二人がOK出すまで叩き続ける。ようやくラストのファイルを入れて、唐沢のジャンプとともに締めくくった。

客電が灯ると三羽は立ち上がって、さっきの男を目で探す・・・。
さっき男が立っていたカウンターの角には、オールドガレージのオーナーが立っていて、満足そうにカップのアルコールを舐めていた。三羽はすぐにステージを下りたかったが、ホールはアンコールが響いていてステージでは須川と唐沢がなにやら合図をしってくる。

（・・・Summertime BluesのWhoバージョン。）
三羽は了解してカウンタを入れる。バンドとしては最高の復活ステージとなった。

曲が終わると三羽は、一目散にステージを下りて男を捜す。やはりどこにもいなかった。

「タケル、やったじゃねえか！大成功の復活だぜ！」カウンターの角のオーナーに声を掛けられ肩を叩かれる。

「あ、ありがとうございます・・・ヨシトモさん、さっきここに立ってた人知ってます？」三羽はあたりを見回しながら聞いた。

「え？見てなかったなー、お前の知り合い？」オーナーは上機嫌に出来上がっている。

「いや、そうじゃないんですけど。」

三羽はホールの中のすべての人間を観察したが、あの男はいなかった。

三羽は雑踏のような騒ぎのホールの隅に突っ立って、さっきの男のことを思い出していた。

10mぐらい離れた薄暗がりだからはっきりとした容姿は判らないが、自分と同じかそれ以上の背丈だったと思う。・・・三羽鴉は偶然にも、全員174cmだ。

多分40は過ぎている感じで浅黒く隙のなさそうな痩せ顔、とにかく眼光が異常なほど鋭かった。まるで闇に潜んでいる獣を彷彿させるような、ただならぬ眼の力。

何事もなく普通に生活している中では、まず出会わない見かけない種類の「眼」だった。

その別世界の人間の強烈な視線が自分一点に注がれていたのだから、気にせずにはいらなかった。

何を着ていたかは判らないが、闇に溶け込むように佇んでいたから黒っぽい服装だったのかも知れない。

（ヤクザ者のようにも見えるがどこか違う気がする・・・。）そしてあくまで勘だが、桜と何らかの関わりがあるような気がした。

・・・三羽は四方から肩を叩かれる、「おめえ、やるじゃねえかい！」「次のライブ決まってんの？」「今度、俺等とジョイントしてくんねえ？」・・・ファンになりました、握手してください。」話しかけてくる相手と言葉を交わしたり握手したり、携帯やデジタルの画像に収まったり。妙な気分のひと時を過ごす。

男のことは気に掛かるが、目の前で多くのオーディエンスに誉められて、ようやく復活ライブの成功を実感して嬉しくなった。

須川・唐沢・三羽そして千夏と紗希は、ローズの近くの居酒屋でさやかな打ち上げをはじめる。

土曜の夜だから安酒場は相変わらず騒々しかったが、千夏が気を利かせて個室を予約してあったので、一同はくつろぎながら酒を楽しむ。

・・・宴の席はライブの成功の高揚感を伴って、様々な話題で盛り上がる。

席を仕切るのはやはり姉御肌というか、親分肌の千夏。

まるで千夏の女房のように、周囲に細々と気を配るのは紗希。

噓れ果てたガラガラ声で大笑いしながら、酔って同じ話ばかりして
る須川はバンドのリーダーとして心から達成感に浸っているようだ。
人を笑わすのが上手で人知れず周囲に気を使う唐沢は、千夏とのやり取りのリアクションで場を一層盛り上げる。

いつもは一番飲んで酔ってヘタすると他の客とケンカを始める三羽だが、今夜はいくらかおとなしく飲んでいる。

「あれれ？タケル、勢いねえじゃん。」須川は笑いながら言ったが、もう呂律が回っていない。

「タケルは桜が待つてる家に早く帰ってえんさ、な！」唐沢はそう言って千夏の方を見る。

千夏は（・・・からかうんじゃないよ。）と、空中で唐沢を小突く仕草をする。

三羽は千夏に笑いかけようとしたが、ひきつったような苦笑いにしかならなかった。

左手で頼杖をついたまま、空のグラスをカタンと鳴らしてテーブルに置く。

「・・・それがさ、もういねえんだよ。・・・いなくなっちまったんだよ。」

一瞬、畳敷きの小部屋は沈黙する。三羽の空グラスの氷がカラリと鳴った。

「お前、どういことだよ？・・・いつからいねえんだよ？」須川と唐沢は同時に口を開く。

「・・・おとといガレッジでリハやっただろ？・・・あれでコウヤに送ってもらって帰ってみたらいなかった。」三羽は頬杖を突いたまま、空のグラスに話しかけるように呟いた。

また沈黙が訪れた個室は、天井あたりが白く煙っている。

「・・・桜ちゃん、自分で出てったの？なんかメモとか書き置きみたいなのとかなかったの？」千夏はテーブルに手を付いて、身乗り出すように聞く。

「メモやなんかはなかったな。ただ部屋ん中がさ・・・」三羽はその時の状況を、一同に細かく説明した。

「俺をぶちのめしたノッポ野郎が関係してんのかなー。」唐沢は天井を見上げて煙を吹き上げる。

三羽は不意にさっきのローズにいた男のことを思い出して、全員に聞いた。

「俺等ん時にカウンターの角にいた男のこと知らねえかな？すげえ目つきの鋭い男だったんだけど。」

須川は唐沢と、千夏は紗希と顔を見合わせていたが、誰も記憶になかった。

三羽は愕然となる。「リョウタとコウヤは俺より客に近えのに憶えてねえんか。」

・・・だが、あの男の滞在時間は短かったのかも知れない。次に見た時にカウンターの角にいたのはガレッジのオーナーだったのだから。

「あつ！そうだ、これこれ！」千夏は畳の上に置いたバッグから、二つに折った紙切れを出して三羽に渡した。

「桜ちゃんの・・・あ、正確にいうと名前違うんだけど、彼女の住所判ったんだよ。」

そう言われると三羽はいくらかドキドキして、紙切れを広げる手が慎重になる。

『○○町 396-55 西柳美樹』

（・・・ニシヤナギ ミキ。・・・ミキか。）若い女らしい水性ボールペンの文字が、そこにあった。

メモを書いたのは千夏か別の誰かか知らないが、三羽は桜が自分で書いたような錯覚に陥る。しばらくその紙切れから目を離すことが出来なかった。

『私を助けにきて』そう訴えているような気がして、胸が詰まる。

喉の奥に違和感を覚えて、そのまま眺めていたら文字が滲むことになりそうだったから、あわてて紙を畳んだ。

「千夏、ありがとな。」三羽はあくびをしてみせる。

「・・・桜は美しい樹でしょ？ある意味近いよね。ねえ、紗希。」紗希は三羽の心情を悟っているかのように切なそうな表情で頷いた。

午前3時、須川と紗希、唐沢と千夏と三羽は手を振って逆方向に別れていく。

まだ春先だが、夜中でも上着がいらなくなるほど暖かくなっていることに気付く。

「・・・どうすんだ？タケル。」しばらく歩いてから唐沢が聞いてきた。今夜は唐沢も三羽も、足取り・記憶ともしっかりしている。

「明日、行ってみようと思う。桜ってか美樹の家まで。」舗道は三人の足音以外は聞こえず、通り過ぎるタクシーも代行もまばらだ。いつも通りの分岐点で、いつも通りに手を振って唐沢と千夏に手を振って歩き出した三羽は、あの夜のことを思い起こしていた。

・・・あの小路まで差し掛かったところで立ち止まり、暗がりを見つめる。

ショートホープに火を点けて、いつもと変わらない小路の奥を眺めていると、腹の底に何かが沸々と湧き上がってくる。

翌朝早めに目覚めた三羽は、身支度を済ますとアパートの階段を下りていく。

午前9時だが、日曜日のせいか他の部屋は、まだ寝ているようにシオンとしていた。

薄曇りの空を見上げて（・・・なんとか保つかな。）と、ショートホープの煙を吐き出した。

アパートから2分ほど歩いた月極め駐車場の隅に、グリーンのテナト生地のカバーに覆われたクルマが、ひっそりとうずくまっている。アスファルト舗装の上でタバコを踏み消し、カバーをはぐる。

昭和47年型トヨタ セリカ 1600GTV。

39年経ったモスグリーンのボディーは、腕のいい板金塗装職人の手により、2度のレストアと丁寧な焼付け塗装を施しているため、まるで新車のように艶めいている。

ボディーに埋め込まれているメッキのバンパーも、フロント・リアとも一点の曇りもない鏡面を呈している。

三羽はフェンダーミラーを軽く撫でると、ポケットから鍵を出してドアを解錠する。

丸みを帯びた厚手のドアをドシンと閉めて、アクセルをポンピングしてチョークレバーを引き、セルを回す。

まるで航空機のような丸いメーターが並ぶ黒いインパネの中の、タコメーターの針が安定するまで、アクセルに軽く足を乗せる。

パワーアシストのない重いステアリングだが、交換してあるナルデイの小口径ウツドステアリングに指を掛けると、セリカが『早く走るうぜ！』と訴えている気がしてくる。

・・・三羽が幼い頃から家にあつたクルマ。今年50歳になる父親

が、若い頃に魅せられて買ったクルマだった。

営業マンの父親はいつも社用のカローラに乗っていたため、セリカは車庫の隅で埃をかぶっていた。

幼い頃から（・・・免許取ったら絶対このクルマに乗る。）と決めていた三羽は、免許を取ってすぐに、大手家電メーカーの営業所長をしている父親に頼みこんで、というより無理矢理に売ってもらったクルマだ。

アイドリングが安定したところ携帯が鳴る、唐沢からだった。

「・・・今日、行ってみるんか？」唐沢は起きたばかりのようなかすれた声で言う。

「もう出るとこだね。」チョークレバーを戻して、サイドブレーキを下ろす。

「俺も一緒に行くわ、拾ってつてくれや。」「わかった、回つてく。」

唐沢の自宅の前まで行くと、分厚い地図帳を持って手を振っていた。唐沢はセリカに乗り込むと「住宅地図に載ってたわ、桜んち。迷わずに行けんぞ。」

そう言うのと助手席のガラスのハンドルを回して、セブンスターに火を点ける。

30分ほどで西柳宅の近くまで辿り着いた、「えーと、この先の交差点を過ぎた2つ目の角を左だ。」

三羽はナビゲーションしてくれる唐沢を連れてきて良かったと実感する。

周囲は店舗が見当たらない古くからの住宅地で、道幅も狭く見通しも悪かった。軽量ブロックを積んだ塀が立ち並び、その塀の櫛石には苔が生えている。

途中、宅急便のハコバンとすれ違うのにいくらか苦労したが、「あ、この先を右折して1軒目だ。」

セリ力を徐行させて左手の家を伺う、やはりブロック塀に囲まれた家の門柱が見えた。

『西柳』の表札が見えたので、少し先までセリ力を進めていくらか広くなったゴミの集積場の隅に停める。

三羽と唐沢はクルマを降りる、助手席の唐沢は体をねじってやっと抜け出る。

2ドアクーペのセリ力はドアが大きく厚いため、こういう時は非常に不便なクルマだ。

相変わらずどんよりと重い空の下を、ふたりは無言で歩く。

ここ一帯に何十軒の家があるのか判らないが、古びた住宅地は見上げた空の色のよう沈んだ感じで、大した物音はしなかった。

多分30年以上前に開発された区域なのだろう、ほとんどの家がブロック塀や生垣に囲まれていて、その向こうの様子は判らない。狭い庭があるだろう先にセメント瓦の屋根が見える。どの家も同じような印象だ。

白っちゃけたアスファルト舗道は、轍やひび割れを補修した跡だけだった。

三羽は『西柳』の門柱の前まで来ると、いくらか心臓が高鳴る。

その家は木造の二階建てで、30坪ぐらいの小ぢんまりとした家だった。門柱から2m先の摩りガラス入りの格子戸の玄関は、埃に汚れている。

「郵便受けには何も入ってねえな。」唐沢の言葉で、門柱に付けられた郵便受けを見ると確かに何も差さっていなかった。

ブロックの門に踏み出して左右を眺めると、ジメジメとした日陰にいくつかの植木がある。あとは水道のホースリールが忘れ去られたように色褪せているだけだ。

見上げた二階の窓はカーテンが引かれていて、何年も開かれていないかのように微動だにしない。

「・・・まるで何年も空家みてえだな。」三羽は独り言のように呟

く。

ふたりで家の裏側まで歩いて様子を見たが、土間コンを打った車庫にはクルマもなく、裏手から見える窓もカーテンが引かれたままだった。

「・・・ただひとつ気になったのは、右側の窓のカーテンのみが薄い花柄のものだったことだ。

（・・・あの部屋が桜の、いや美樹の部屋なのか。）三羽はそのカーテンが少しでも揺れることを祈るように見上げていた。

「タケル、おばさんが見てるぜ・・・。」唐沢が耳元でささやいたので振り向くと、通りの向こうから怪訝そうに見つめている中年女と目が合った。

三羽は、あからさまに不快な表情で見つめてくるその中年女に、憤りの火が点く。

体を向き直し踏み出そうとしたところで、唐沢に止められた。

「やめとけよ、近所のもんにしてみりゃここらをうるつくだけで不審者と思うのも仕方ねえことだぜ。・・・事件はまだ解決してねえんだからな。」

唐沢は表情を変えずに三羽の腕をつかんで、来た道を戻りはじめる。

「あのババアがサツに電話入れたら、ヤツらすつとんで来やがるぜ。」

「唐沢の力強いささやき声で三羽は我に返る。」

「コウヤ、わりい。お前の言う通りだわ、さつさと逃げなきゃな。」

そう言うふたりは急ぎ足でセリ力に戻る。乗り込むとすぐに飛び出す。

「・・・この辺のヤツらが、こいつのナンバー通報してなきゃいいが・・・。」唐沢はセブンスターに火を点けて、煙とともに吐き出す。

三羽はその言葉にうなづきながらも、犯人でもないのにどこか後ろめたくなってる自分らの状況を妙に思った。

「・・・収穫はなしってとこだな。」西柳家からだいふ離れてから、唐沢が呟く。

「まあ、ハナから期待はしてなかったわ。」だが三羽は重いセリカのハンドルを回しながら、心の片隅に期待があつたことを否定出来なかった。

いくらか退屈した唐沢が、グローブボックスを開けて一本のカセットテープを取り出す。

「カセット、ひさびさに見たわー、これ掛けるぞ。」そう言うとデッキに挿入する。

『もうおしまいさ　すべては手おくれ、なにかもが狂っちまった今、思い出すのは　思い出すのは、雨さえ凍てつき　氷ってたあの夜』

「これ誰の歌？」唐沢はうる覚えでハミングしながら聞いた。

「えーと誰だっけ。俺が小せえころ聴いた記憶はあるが。親父のだからな。」三羽はそう言いながら、懐かしさ以上に新鮮に心に突き刺さってきた。

『君はいつまでも　銀幕のヒロイン、ラストシーンは美しく　思い出には足跡さえ　残さずに・・・』

「あ、そうだ。シネマクラブって歌だわ、多分。」三羽は目の前に桜を見ていた、（思い出には足跡さえ残さずに・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2811s/>

ライジング・サン

2011年7月7日00時29分発行